



金澤  
八景

糸内子



千厓文庫  
文庫24  
A1624





# 金澤八景

宝物蔵乃六浦の庄。雲名八本教く此。多々  
 詠多し。金澤や筆も及む。八の景。東成遠ん  
 見返とハ。海邊みんく。際も形く。泊る舟の信きて。  
 書も乙鞆かつと停。帆し。家路へ急く。かば此業。甚ほる  
 業此と繁く。名く種小智れ也。燕ハ偏して中恒や。  
 綾ふせやも一匹。以。君小泉の秋の多。信ん志のどは



宮風に裾や小袴の節をゆるりひりりと平涼に  
落く雁面を也。涼しくも小笠仲秋乃。志も踏めて  
さむく六詠の涼は秋の月。作ぎ三宿此御社也。朱此  
玉垣を隔て野橋乃夕照夕づく。笠がさむけて遠近此  
道りく人おははる。画くことい何れと見へりも  
又かくれつも。別流此晴嵐且秋。未あこれ内川此。  
暮を此景と志添へ色せ。まや黄昏此懸る。八。

称名も此噴霧あり。桜八本と申れが此の流に此  
勝景乃。名にしとく。西御橋向ひも。まも和あくと  
一本以し。も。梅梅。名のと流に。黒梅に。枝葉葉とて  
千代の聲。雀の浦の一本。同。非情の樹をれ。怖しき必の  
龍混拍トミヤド可此酒をる。深ぬ。喜景此相青丹トシ。系郎乃  
橋トシ。い。ま。ま。と。う。れ。あ。文。珠。香。賢。此。二。本。ハ。此。景。之。深。葉。乃  
み。程。い。ま。ま。常。法。志。多。し。は。の。場。ま。つ。く。四。石。此。生。内。り。



美如不嫉石之是。人生此世之業。心朽の石に。かき  
 へく。末世のいひ。心と。の也。波名。つる。飛石。佛神。尊。護  
 此力に。ゆき。此象と。啓。つ。物。福。石。と。呼。ぶ。故。に。け。理。世。後。心。高。  
 ち。の。よ。并。付。て。此。神。を。く。國。土。に。生。ま。す。幸。福。と。絶。の。言。可。得。え。ん。  
 之。外。教。多。の。名。所。の。果。子。結。も。左。に。れ。ん。か。る。を。双。の。絶。業。と。  
 佛。に。眼。下。に。待。た。事。能。見。堂。此。名。と。先。で。よ。く。見。の。を。諸。人。と。  
 之。業。繁。く。東。國。子。に。く。一。て。六。世。八。降。ま。り。後。

彫工中出十國

能見堂八景

洲崎晴嵐

心越禪師

滔々驟浪歛餘暉  
 滾々狂波遶竹扉  
 市後日斜人靜  
 悄行雲流水自依依

無生居士

よきもくふをさ紀の里  
 名朝もあを  
 ももくあ〜〜あ  
 たり〜れ市人

瀬戸秋月



清瀨涓々不繫舟風傳虛籟正中秋廣寒  
桂子香飄處共看水輪島際浮  
よふ高き乃漱戸に殊風小夜もあふ  
千里に沖ふさあはつる影

小泉夜雨

暮雨淒涼夢亦驚甘泉汨々聽分明蓬窓  
淹蹇無相識腸斷君山鐵笛聲  
かちまく死の海をる魚も袖のまき

なしたる家江乃昔残をねる

乙艦歸帆

朝宗萬派遠連天無恙輕帆掛日邊款乃  
高歌落雲外依稀數艇到洲前  
沖津あふ乃りりみしもる帆の  
をともし浦小くはあふるん

稱名晚鐘

夙音名藍成覺地華鐘晚扣若鯨音幽明



聞者咸生悟一片迷離祇樹林  
さるふあしな山名よあふん縁ん此  
あ方よりとくくいしあひのあ傍

平瀉落雁

列陣冲眞堪入塞荻蘆蕭瑟幾成隊飛鳴  
宿食恁棲遲千里傳書誰不愛  
心せむふま砂子こし流敷るくま  
くふく千河うたふる一原う縁

野島夕照

獨羨漁翁是作家持竿盪漿日西斜網得  
魚來沽酒飲披蓑高臥任堪誇  
夕日る民神鳴乃浦りあまのあみ法  
め形るあ里のあまれあま

内川暮雪

廣陌長堤竟没潜奇花六出似鋪緜渾然  
玉砌山河色遍覆危峯露此尖



木陰かゝく松とむも積るくると古  
いざ志了ゆきのみるあて江流とる經

武州金澤擲筆山能見堂有瀟湘八景  
之風味因觀鎌倉志甚詳耳一夕寥々  
對青燈漫賦八景之陋句以識斯勝境  
云歲執徐正夏日東臯越杜多州

天明甲辰秋七月擲筆山地藏院現任來仙再刻